

# 政治動かす最前線体感

6日から11日にかけて、日本や米国など21カ国・地域が参加するアジア太平洋経済協力会議（APEC）の首脳会議や閣僚会議がベトナム中部ダナン市で開かれた。現地の行政機関では県立大の学生3人が11日間にわたってインターシッピング（就業体験）に励み、国際会議の裏側を体験。学生の活動や、人材育成に向けダナン市との結び付きを強める県立大の取り組みを紹介する。（この連載は佐世保支社・荻川裕之が担当します）



〈上〉

9日朝、熱帯特有の強い日差しが降り注ぐダナン市中心部。道路にあふれていたバイクの「波」が一斉にせき止められる。パトカー

に先導され、黒塗りの車が会場に滑り込んだ。APEC開催を記念して整備された公園の開式。各国政府の事務方幹部らが続々と姿を見せた。「テレビの中の世界だな」。国際経営学科2年の石本信太郎さん(20)は国際会議に関わっていることを実感しつつ、記念植樹の手助けなど英語でやりとりしながら裏方として動き回った。石本さんは2016年度に新設された国際経営学科

## 国際会議



APEC開催の記念碑の前で外務局のスタッフと写真に収まる県立大の（右から）石本さん、溝田さん、中山さん＝ベトナム・ダナン市

の1期生。同級生の溝田卓真さん(20)、中山莉聡さん(20)とベトナムの地方政府で外交部門を担当するダナン市人民委員会外務局で就業体験をしていた。同学科は海外でのビジネス研修が3年次の必修科目になっており、14年度から

閣僚会議の会場に入ることにはできなかったが、ボランティアスタッフとして通行証が発行され、関連行事で業務に当たった。世界の政治や経済を動かす最前線を体感した石本さんは「すごく刺激的だった」と語る。溝田さんはAPEC開催に向けたダナン市の取り組みを紹介する英文を日本語に翻訳する業務を任せられた。「歴史的な背景を理解しないと分かりやすく説明できない」。政治や経済に関する知識を身に付ける必要性を痛感した。佐世保出身で「英語が使える仕事をしたい」と同学科に進んだ中山さん。研修前は「国際的な会議の場に学生の私たちがいていいのか」との思いもあったという。だが外務局で働く中で、会合のセッティングや通訳などとして支える「同僚」の姿に触れ、心を動かされた。「国と国をつなぐ手助けをする仕事はすてきな」。遠い存在だと思っていた世界がちょっと近づいた気がした。

既存学部で試行している。外務局も当初から協力。大規模なAPEC開催時の受け入れを働き掛け、国内外から約1万2千人が参加する大型コンベンションでの就業体験が実現した。3人は外務局のオフィスを拠点に活動。首脳会議や

## メモ

APECとダナン APECは21カ国・地域で構成し、

世界の国内総生産（GDP）の約6割を占める経済の枠組み。ダナンで6日から11日にかけて、最終高級実務者会合、閣僚会議、首脳会議を開いた。ダナンはベトナム中部の中央

直轄市で人口約100万人。17世紀の長崎の朱印船貿易家、荒木宗太郎が妻に迎えた安南国王女アニオー姫の出身地とされる。近年リゾート地として脚光を浴びている。